

教育の世紀社の総合的研究(その1)

啓明会の地方組織の実情

— 秋田と兵庫を中心に —

中内敏夫(お茶の水女子大学) ○橋本紀子(好栄養大学) ○小林千枝子(お茶の水女子大学)

研究の目的と方法

本発表は民間教育史料研究会による「教育の世紀社の総合的研究」の第一回報告であり、啓明会運動の実像を把握することを目的としている。啓明会については、とくに中央幹部の動向を分析した研究が進められており、日本最初の自主的な教員組合としての積極面と同時に、下中弥三郎の私的集团的性格やアナキズムの傾向が負の側面として指摘されている。これに対して我々は、運動の実態を会員教師の日常行動のレベルで捉えらるべく地方組織に焦点をあてた。なかでも、東北と関西という地域性の影響も少なからず認められる秋田と兵庫のばあいを調査した。その結果、教員組合運動として教育の制度的改革や教員の生活条件の改善などが問題にされる以前に、教師としての自己確立が会員教師達の大きな課題であったこと、さらに、その多くが農民出身であった彼らはいわば「農民教師」ともいえる意識状況にあり、そのことが次の二つの方向をとらせていること(とくに秋田の事例)を確認した。

- ①. 農民的な意識状況からの脱出をめざして同時代の教育学教養を積極的に身につけ、「自由教育」的実践を追求する、
- ②. ①とは逆に、農民の生活に戻り、そこから新たな教育と教員の像を模索する。

I. 秋田のばあい

(一). 秋田会員の一般的傾向

教員組合啓明会の機関誌『啓明』(のうち『文化運動』)によれば、1924年ま

で秋田から26名が入会しており、そのうちの10数名は秋田師範の卒業年が判明している。本発表はこれら秋田師範卒業生に数人の農民を含めた約半数の会員の動向を把握した結果である。

(二). 会員にみられる二つのタイプ

- (1). 新教育運動の側から啓明会に近しい人達—丸山修一郎を座長とする「青年教育者同志会」の動向
- (2). 農民運動や消費組合運動から啓明会に関係した人達—鈴木真洲雄の「兄弟愛道場」とその周辺

(三). 啓明会(中央)の動向と秋田(支部)

これまでの研究で、22年末から25年3月までは啓明会の「農村志向」の時期であるといわれている。それについては、秋田のばあいをみても、時期的に若干のズレはあるが合致する傾向が認められる。さらに、教育の世紀社の総合的研究で我々が追究してきた「自由教育」派と「生活教育」派の違いが秋田ではみられ、そこを追究していくと同時代の「農民教師」達が直面していた課題をうかがうことができる。

II. 兵庫のばあい

— 『蒼空』グループを中心に —

(一). 兵庫会員と会誌『蒼空』

啓明会の機関誌によれば、24年までに17名が兵庫から啓明会に入会している。『蒼空』はそのうちの3名(大西伍一、池田種生、難波忠雄)を中心として発行された同人誌である。発行されたのは23年11月で、秋田のばあいと同様に啓明会の「農村志向」の時期に

あたる。

(二). 教員教育の場としての機能

『蒼空』は大西が姫路師範の同窓生であった池田種生に呼びかけ、各々の友人達をまきこむ形で成立した。自由に何でも語りあうことが同誌発行の趣旨であり、教員の他に農民を含んでいるという特色がある。内容を見ると、難波(農民)の「今日の社会制度家族制度社会道徳があやまっている以上、真の恋愛は出来ません……真に民衆の社会である社会を建設するために全力をあげて進まねばなりません」というような社会改造必要論が目立つ。一方、教師であった大西や池田は「不正義に達らして居たのだ」とか「僕は悲しいユダなんだと思ふ」というように、自分の内面や生き方を告白している。彼らは職場での孤独感や村人の様子を積極的に語ることによって、教師であり、かつ人間であろうとしていた。教師が参加しているにもかかわらず子どもがあまり語られていないのも一つの特色である。一見したところ彼らが子どもを見ていなかったように思えるが、そうではなく、村で生活する者の一人として子どもを捉えようとしていたその結果だと考える。

(三). 『あをぞら』への転生

25年前後から東京の女教員達(小林かねよ、金子史子、梅里久子)の投稿が目立つようになる。彼女らは、「自由」への欲求、築地小劇場の文化、郷里の農婦の様子などを語ることによって『蒼空』に新しい色あいを添える。

一方、同じころに兵庫からも「俺らあ、貧乏で食へないんぢや」といった「百姓の歌」を語る新同人が現われ、兵庫メンバーと東京メンバーの間に対立のきざしができてくる。そして結果的に、前者が後者をまきかえす形で、農民自治会の準備誌となる『あをぞら』を発行するようになる。彼らは東京の新同人達を組織化することよりも、農民と教師の交流誌としての性格を貫こうとしたのである。

結論と今後の課題

以上、地方レベルでの実態把握を通じて、教師としての自己確立が啓明会運動の主要な課題であったことを我々は確認した。これは、啓明会に限らず、いわゆる「師範型」教師に飽きたりなくなっていた1910年代以降の教師達が等しく直面していた課題である。会の中心人物であった下中が「教師も労働者である」と捉えつつ、なお教師と労働者の差異性を認めていたことはすでに指摘されているが、そのことは大まかなところでは地方の会員教師達についてもいえる。しかし、それは未分化な形で存在しており、文学を求める者、いわば「専門職」教師をめぐる者、ある種の社会運動に関わる者など様々である。従って今後は、従来の研究にありがちなアナ・ボルの対立で啓明会を捉えるのではなく、こういった教師の自己確立と層としての教員の制度的政治的解放との二つの課題を統一する契機が啓明会運動の中にあっただのかという観点から研究することが必要である。